

# 北浜コラム vol.2

2011.08～2013.03

ふれあいの家ーおばちゃんち



## あこがれの木

---

北浜こども冒険ひろばの真ん中にあるカエデの木は子どもたちのあこがれの木。でもこの木にはなかなか登ることができません。なにしろ根元から一番低い枝まで4mはあるのです。

小学校4年生のA君はこの木にロープをかけてほしいとやってきました。ロープにつかまりよじ登ろうと考えたのです。あと少し。でもそのあと少しが難しい。「腕がパンパンになっちゃったよ」と降りてきました。

それからA君は広場に来るたびに、カエデの木に挑戦。あと少しの日々が続きました。

2週間後、「今日こそ登るよ」と現れたA君。ロープ掛け機の使い方もマスターし、自分でロープをかけ、みんなが見守る中なんと最初の枝に到達したのです。満面の笑み。「夢がかなった！」周りで見ていた人たちからも、拍手が起こりました。降りてきたA君はやはり「腕がパンパンだよ」と言って笑っていました。

(みやさん)

## あそび場の主役

---

北浜こども冒険ひろばは5時近くになると片づけが始まります。

ある日のこと、広場全体が片づけモードになり忙しくみんなが動き回っていると、Nちゃんが大型ベビープールの

水をこぼそうとしていました。片づけようと思ったのでしょうか。でもNちゃんは3歳。水をこぼすためにプールを持ち上げられるとは思えません。それでもがんばっているのは、ここが自分の遊び場だという意識です。みんなと一緒に力を合わせ遊び場を作っていく主人公なのです。「大丈夫...」と声をかけて、私は荷物を倉庫に運び、そんなNちゃんを手伝おうと戻ってきました。するとNちゃんがズルズルと空のプールを引きずって来るのです。私は思わず「Nちゃん大丈夫だった？」と声をかけました。するとNちゃんは「大丈夫。だってSちゃんが手伝ってくれたもん」と涼しい顔で答えました。私は驚きました。だってSちゃんは1歳。Nちゃんですえそんなに片付けの大きな力と考えていなかったのに、1歳のSちゃんが・・・。私たちの北浜。片づけだって一人前。そんな思いが伝わってきました。Nちゃんの横を「あ、あ」と言いながらはだしのSちゃんを通り過ぎていきました。私は大きなカブのネズミ君を思ってしまいました。

(みやさん)

## 漁師のハンモック

---

お母さんに手伝ってもらい、A君（5歳）はハンモックに寝そべりました。すると「あ、お月様」A君の顔が輝きました。お母さんが後ろを振り返り青い空を見上げると、メタセコイアの木の下には昇ってきた大きな丸い月がありました。

北浜こども冒険ひろばに漁師のハンモックがやってきました。東日本大震災で漁船や漁網を失った気仙沼の漁師たちが、漁網作りの技術を生かし作ったハンモックです。

恐る恐る乗る子ども達。うまく乗れないとすぐにひっくりかえってしまいます。にぎやかな笑い。そおっと揺らすと波に揺れる心地よさ。激しくブランコのようになってしまう、歓声が上がることもしばしば。笑顔が絶えません。友達同士で乗ることも多いのですが、一人が降りようとするとバランスが崩れ他の人が落ちてしまうこともあります。こんなところでも友達への気遣いを学んでいるのですね。今では自分たちで吊ることができる子どももいます。

漁に出る日を夢見て編んでくれたハンモック。ここでは子どもたちの笑い声と夢をやさしく包んでくれています。

「気仙沼のおじさんたち、ありがとう。大切にしているよ！！」

秋の日は空が美しい。空とハンモックは友達なのかもしれません。

「きれいだね...」茜雲が空一面に広がっていました。まもなく5時の鐘が鳴ります。

（みやさん）

## 北風ぴゅーぴゅー寒さに負けず

---

真冬の北浜こども冒険ひろばに常連の親子がやってきます。寒さをものともしないNちゃん、Mちゃん、Kちゃん、Hくん、ハンモックやケヤキの木につるされたブランコがお気に入り。1年生のZくん、Mくんは火起こしを楽しんでいます。

ついこの前に歩き始めたばかりのRくんは穴掘り後のでこぼこした地面にしっかりと足を下ろし、バランスを巧みにとりながら走っています。学校帰りのAちゃん、Kちゃんに「お帰りなさい」と声がかかります。先に来て遊んでいる子どもたちを見守っていたお母さんたちです。そんな光景は真夏の暑い日ざしの時も、そしてこの頃の真冬でも毎日のように繰り広げられているのです。

子どもの遊びは大人へ成長するために必要な何物にも代えがたい力を持っています。とりわけ戸外あそび、仲間あそびは大切です。でも、大人たちはわかっているにもかかわらずその時間を子どもに与えようとしません。しかし、ここ北浜には素敵な母親たちがやってきます。ビルにさえぎられ日も陰り、目黒川から吹き上げてくる冷たい風をものともせずになが子のあそびを見守りながら真っ暗になるまでひとしきりおしゃべりを楽しんでいます。

あぶない！あぶない！と子どもに付いて回るのではなく、なが子を毎日見て知り尽くしているのか肝が据わっています。常連の子ども達は大人用のシャベルを使い、穴を掘っても、木登りしても、たいした怪我はしません。親もまた子どもにとことん付き合っていると激しい兄弟喧嘩や、遊具の取り合いなども子ども同士で解決する力を身につけていくもんだと心が鍛えられ、体も寒さをものともしなくなっているようです。

(みこ)

## 冬はたき火がうれしい

---

「きれいだね 町みたい」

夕暮れ、たき火を見つめる子どもたち。オレンジ色の光に子どもたちの顔が照らし出されます。たき火のフィナーレ。炭化した薪にチラチラと明滅する光。それは遠くから眺める町の夜景のようです。遠い昔からこうして私たちはたき火を見つめてきたのでしょうか。

たき火にはたくさんのお話があります。紙を使わず、木くずを作って火を起こし、薪をすべて燃しつくす。完璧なたき火といわれる技に挑戦する4年生たち。色々なおやつを網の上で焼いてたべることが大人気だったおやつ研究会。お湯を沸かし、お茶を大人たちにふるまってくれた子どもたち。

家でも話題になることがあるそうです。

「ねえお母さん、この芋、北浜で焼いてもいい」

「このリンゴ北浜で焼いてみようかしら」

そんな話を聞くとスタッフは嬉しくなります。「姉ちゃんが、あんた北浜行ったでしょって言うんだよ。北浜の匂いがするって」たき火の匂い、それは私たちの勲章のようでもあります。

いや、燻証かな？

たき火がうれしい冬です。あなたものんびりたき火をしてみませんか。仲間とするたき火の楽しさは格別です。子どもも大人も、体も心も温まりましょう。

(みやさん)

## 失敗を笑っちゃえる能力

---

「わー」大きな歓声がするので振り向いてみると、穴の中で笑っているA君5年生。自分で作った落とし穴に落ちてしまったのです。かなりの時間を使って、完璧な落とし穴を作っていたのですが……。どろどろになり、悲惨な姿。だけど満面の笑顔。

子どもってすごいなあと思います。こんな失敗も笑っちゃえるんですね。仲間が笑い、広場全体に笑いが広がっていきました。やがて子どもたちはすべて穴に落ちる遊びを始めだしました。失敗を自分で笑っちゃうことで、遊びが生み出され、また新たな笑いが生まれていく。そしてその循環が幸せを生み出していく。

今を生き、今を心から笑い楽しむことのできる子どもたち。私たちはいつも彼らからたくさんのことを学ばされます。

空は青空。もう春です。

(みやさん)

## どろだんごの隠し場所

---

今年もどろだんごのブームがやってきました。あそこの土が一番いい。この後は銀砂をかけて…。銀砂はこの道の乾いた土が最高！子どもたちは密かに伝え合っています。どろだんごには子どもたちの科学があります。

どろだんごが流行り出すと、公園のそこそこにどろだんごが隠されていきます。どろだんごの面白さの3分の1は、このどろだんごをどこに隠すかでしょう。ニタニタと私の前に現れた2年生3人組「誰にもわからないところに隠したよ」確かに誰にもわからなかったのですが、彼らも探せなくなってしまいました。それならと埋めたところを地図に描いていたのですが、ある日掘りだそうとすると今度は泥と一体化。もちろん彼らもあきらめません。ある日のこと「絶対誰にも取れないところに隠したよ」と言った彼らの目線の先は木の上。高い枝にスーパーの袋がぶら下がっていました。でもやがて雨が降り…

どろだんごを隠すのは、自然との闘いでもあります。その中で子どもたちは知恵をみがき、チャレンジを繰り返していきます。飽くなきチャレンジ。いつも明日がある。それが子どもたちの世界です。

(みやさん)

## ダンゴムシ物語

---

「行け！！」「がんばれ！ダンダン」小さいダンゴムシに声援がとびます。ダンゴムシレースには様々なドラマがあります。

ボブサップとエレガンティという2匹のダンゴムシがいました。他のダンゴムシよりも一回り大きい2匹は、最初はのんびりでもその加速力で群を抜いていました。レースの後育てられることになった2匹。ボブサップの持ち主のK君（中1）はクラブ活動や習い事で忙しい中、足しげく北浜にダンゴムシの面倒を見にやってきました。しかしある日のこと、突然ボブサップが亡くなってしまったのです。原因は分かりません。もう高齢だったのでしょうか。彼はダンゴムシの墓を作っていました。墓標には「ダンゴムシの神ここに眠る」と書かれていました。次回のレースにはこのボブサップとエレガンティの2匹に挑戦しようと張り切っていた子どもたちもいました。そんな子どもたちを思い残念な気持ちで、私は残されたエレガンティをそっと手に乗せました。するとエレガンティのおなかには赤ちゃんが…。そうボブサップの赤ちゃん、忘れ形見がそこにいたのです。

ダンゴムシは自然へのパスポート。小さな命との出会い。大人目から見るとかわいそうに見える事もたくさんあるかもしれませんが、でもやさしく見守ってあげてください。たくさん遊んで大好きになって。自然の面白さ不思議さ大切さを実感して・・・その時、地球の未来を守る確かな心が育つのです。

（みやさん）

## 居場所

---

北浜には、ゆったりとくつろいでいる人がたくさんいます。子どもはもちろん、禁止事項の少ないひろばで安心して好きなことをして遊んでいます。一緒に来ているお母さんや大人の方も、みんながニコニコして、おしゃべりをしたり、子ども達を見守っていたり、時には夢中になって遊んでいたりにしています。また、指定席のベンチに座っている地域の年配の方々も元気に遊ぶ子どもを目で追いながらゆったりとすごしています。ひろばの準備の力仕事や片づけを手伝ってくれたり、お菓子を差し入れしてくださったり、遊びの技を披露してくださる方もいます。生活の中の通り道にしている方は、あいさつを交わし、遊びの邪魔にならないよう心掛けてくれます。そこには、おばちゃんらしい「ふれあい」があふれています。そう、北浜は子どもだけでなく、みんなの「居場所」になっているのです。

私は、4月から北浜のスタッフとして週2~3日勤務するようになりました。これまで30年も子どもと接する仕事をしてきたとはいえ、北浜で初めて会う子どもたちに「よろしく！」と挨拶をするときは、ちょっぴり緊張しました。このひろばに毎日のように遊びに来ている子ども達が、私のことを受け入れてくれるかな？・・・そんな不安がよぎりました。でも、どろんこ、火もし、ハンモック、水遊び、キャンドルづくり、竹工作、いろいろなことをいっしょに楽しみ見守っているうちに、だんだん仲良くなっていきました。そして初めて「いくちゃん！」と呼んでもらえた時は、涙が出るくらいうれしかったのです！私の緊張はほとんどなくなり、職場というよりも、大切な「居場所」になってきたのです。

何よりも、みんながホッとできるように、そして他の公園ではできない楽しみいっぱいのひろばになるように、ゆっくり、じっくりがんばりたいと思います。どうぞよろしくお願いします。<いくちゃん こと 幾島博子 (いくしまひろこ) >

## プレゼント

---

「これ見つけたよ」

秋からのプレゼントが次々に届けられる季節になりました。マテバシイ、スタジイ、クヌギ、アベマキ、シラカシ、松ぼっくり、プラタナス...。子どもたちだけでなく、まちのおじさん、おばさんたちも子どもたちのためにと、いろいろな木の実を持ってきてくれます。

「八潮に散歩に行って拾ってきたよ」

「ほらこんなのが落ちていたよ」

「松ぼっくりは今年はだめだね」

北浜にいないときも、北浜に来ている子どもたちのことを思ってくれているおじさんおばさんたち。その気持ちが嬉しくて、心はホカホカ。そんな思いのこもった木の実が今では山のようです。

まちの温かい思いに包まれて、もうすぐ北浜はドングリ共和国になります。ドングリのネックレスやドングリ人形。ドングリのゲーム。ドングリ博物館。ドングリダンスやドングリの歌...さて何が生まれるでしょう。〈みやさん〉

「ここでは安心して、子どもに声をかけられますよ」

---

子どもたちが自分で火をおこし、たき火をします。たき火をすればお湯を沸かしたくなります。そしてそのお湯でお茶を入れ、公園に来ている人たちに「いかがですか」と持って歩く。それは楽しい風景です。「ありがとう」の音が響きあいます。

ある日のこと、お茶が入ったので、遠くから遊びに来ていた6年生女子に「お茶飲まない？」と声をかけました。すると彼女は急ぎ足で仲間のところへ戻って行きました。こそこそと話しているの何事かと思っていると、突然の大爆笑。よく北浜に来ているMさんが笑って報告に来ました。私はナンパしていると思われたようです。(笑)

まちで子どもに勝手に話しかけると、不審者がられる。落とし物を渡そうとしたら、逃げられてしまう。微笑むと気味悪がられる。そんなまちにいつからなってしまったのでしょうか。

北浜こども冒険ひろばのベンチには、散歩途中のおじいちゃん、おばあちゃんたちがいつもたくさん座っています。たまたまそばにいたおじいちゃんが子どもたちの大縄の縄を回してくれていたり、通りかかったおじさんがオセロの相手をしてくれたり、そんな昔のままの風景が広がっているのです。

「ここでは安心して、子どもに声をかけられますよ」

ベンチに座っていたおじさんが言いました。ここにはまちの幸せの風景があります。大切にしたいと思います。  
(みやさん)

## ステキな日常

---

一昨年の秋から北浜の月曜の担当として、そして時々水曜や土曜には下の娘（6歳）を連れて遊びにやってくるママの「まえちゃん」です。

思えば、プレーパークとの出会いは、小6の娘が幼稚園児だったころ。読み聞かせサークル「はっぴいママ」のみんなで、川崎のプレーパークに出かけて行きました。その当時、品川にはプレーパークはありませんでした。「うちの近所にもプレーパークがあるといいなあ。プレーパークに行くことは、イベントじゃなくて日常であってほしいな」と思っていたあのころ、私が毎週プレーパークで子どもたちを待つ人になるなんて、思いもしませんでした。

北浜では、火おこしを最初に教わりました。マキ割りもロープワークも教わりました。元タインドア派、文学少女出身の私には、毎日が新鮮で楽しいものでした。月曜の北浜は、水曜や土曜とはちょっと違って、のんびりした雰囲気です。おじいちゃんがお孫さんと一緒にふらっとやってきて、ちょっと遊んで行ったり。公園のベンチで一休みしていたおばあちゃん達から、落とし物のごぼうを預かったり。まちの中にある良さを感じます。

北浜で全身泥だらけになって遊ぶ子どものスッキリとしたいい顔、なんだかわからないけど釘を板にうちまくる集中した顔、火おこしを自分一人で成しとげたときの満足げな顔、ドラム缶風呂に入って「ホッ」とゆるんだいい顔、忘れられません。品川のいろんなところに、こんなステキな場所が増えていくといいな～と願っています。

（まえちゃん）

北浜コラム vol.2

<http://p.booklog.jp/book/57432>

著者 : obachanchi

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/obachanchi/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/57432>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/57432>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社ブクログ